

底辺から始まった 俺の異世界冒険物語

Teihen kara hajimatta
Ore no Isekai Bouken
Monogatari!

【ていへんからはじまったおれの
いせかいぼうけんものがたり】

2

ちかっぱ雪比呂

Chikappa Yukihiro

イラスト:Noukyo



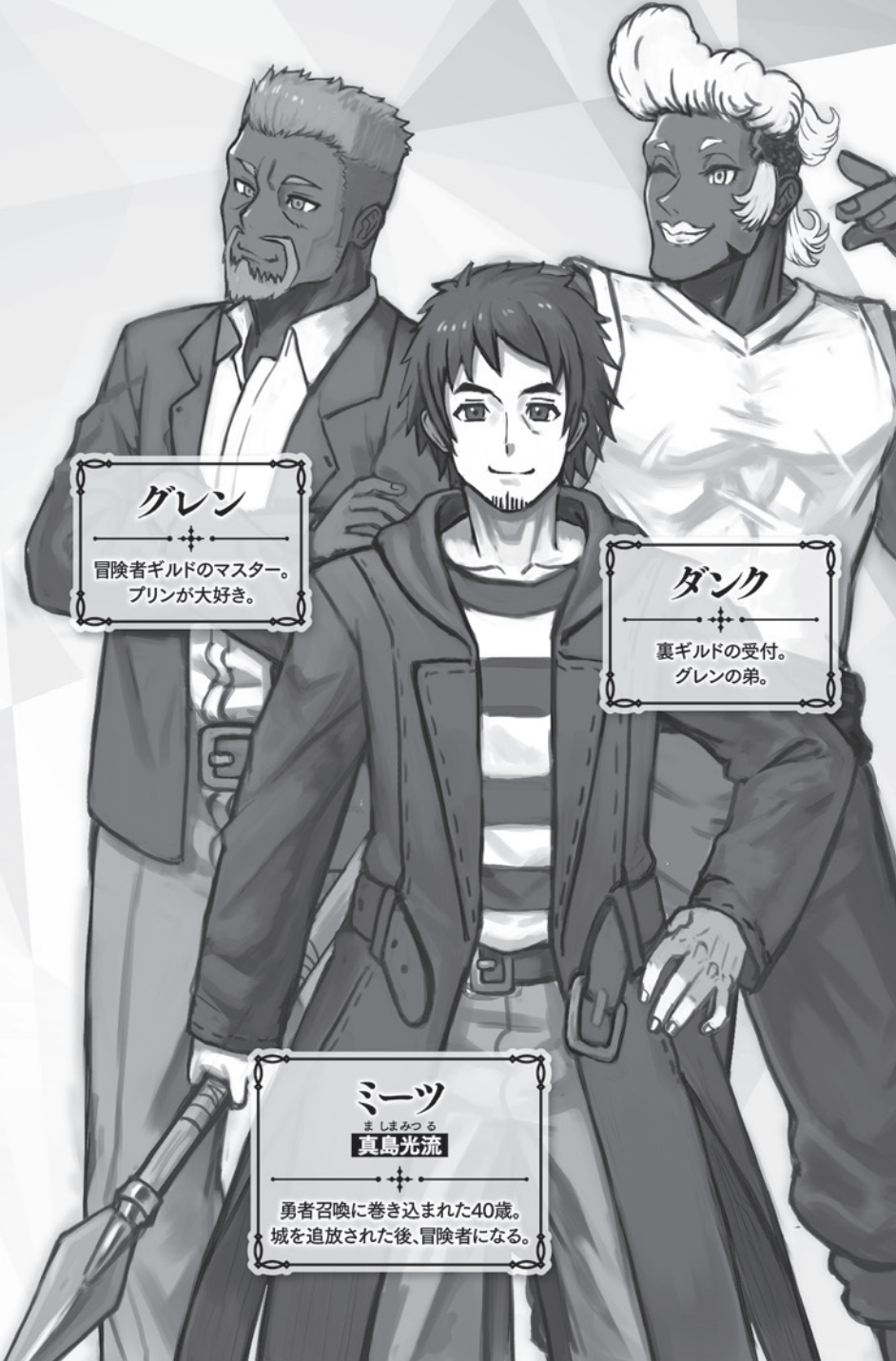
ビビ
—+—
冒険者の少女。
モブ、ポケとは幼馴染。

モブ
—+—
元ストリートチルドレンの
冒険者。ビビに惚れている。

ポケ
—+—
モブの弟。
ややおとなしい性格。

登場人物紹介

CHARACTERS



グレン
—+—
冒険者ギルドのマスター。
プリンが大好き。

ダンク
—+—
裏ギルドの受付。
グレンの弟。

ミーツ
ましまみつる
真島光流
—+—
勇者召喚に巻き込まれた40歳。
城を追放された後、冒険者になる。

第一話

俺は真島光流——ミーツ、どこにでもいるメタボ体型の四十歳独身だ。だがあるとき、若者七人とともに異世界に飛ばされる。召喚したのはクリスタル王国という国の王様で、勇者を召喚しようとしたところに、俺も巻き込まれただけだった。

年齢が高かった俺だけ追放され、おまけに初日に身ぐるみはがされる。だが、冒険者のシオンや冒険者ギルドの副マスターのダンクと出会えたおかげで、どうにか一人で生きていけるようになった。

あと、俺のスキル——想像魔法も役に立っている。想像したことが魔法で出せたりできたりするんだが、珍しすぎるスキルなので、持っていることはなるべく内緒にしている。

そのうち、一緒に召喚された七人のうち五人が王様のもとを離れて俺と再会した。だが、正直なところ世話をする義務はないわけで、俺はすでに受けていた護衛の仕事に出かけるつもりだ。一応、シオンには彼らの面倒を見てやってくれと頼んでおいた。そうは言っても、俺がいない間に何かあったら、夢見が悪いからな。

この世界のことを考えていてあまり眠れないまま、とうとうやってきた護衛の仕事の日。

街の門に向かう前に、宿の女将に数日留守にするからと、荷物の預かりと部屋予約をした。予約は原則できないが、部屋代を俺がいない間も払い続けることで解決した。

そして、今所持しているものを確認する。短槍にナイフ、貴族からもらった服に非常食数点とスマホ、風呂敷数枚——それらを、さらに大きな風呂敷でまとめて包み、担いだ。

短槍だけはいつでも取り出せるように、布を細くねじって腰に巻き、そこに差しておくことにした。剥き出しの刃で歩行中に足を斬ってしまうのを防ぐため、布と紐でカバーを作って被せてある。準備を終えて意気揚々と門へ向かったが、門前の広場にはいくつも馬車があって、どれが依頼の馬車か分からなかった。仕方なく一つ一つの馬車のそばに行き、ギルドでもらった木札を見せるも、ことごとく俺の依頼主の馬車ではない。

とある馬車では、たとえ実力者でもGランクなんか絶対雇わないと馬鹿にされたものの、代わりに、護衛対象の馬車に近付けば木札に数字が浮き出るからすぐに分かることも教えてくれた。

馬鹿にされたときは恥ずかかったが、アドバイスは助かった。

そして、広場にある馬車に近付いては、木札の反応を確かめていく。しかし、広場に俺の依頼主の馬車はなかった。

もしかしたら、木札に数字が出るなんて嘘で、騙されたのではないかと思いはじめていたとき、新たにやってくる馬車が見えた。諦め半分で近付いてみると、持っている木札がポワツと温かくなって、じんわりと『94』という数字が浮かぶ。

『94』——『苦しんで死ぬ』。不吉な数字だが、考えないことにしよう。正直、この馬車で反応がなければ、諦めて帰ろうと思っていた。

「おはようございます。ギルドの依頼で参りました、Gランクのミーツと申します。今日から護衛を務めますので、よろしくお願いします」

Gランクなんて使えないと思われないように、馬車を操っていた護衛対象である商人に元気よく挨拶し、ギルドでもらった木札を渡すと、なぜか驚かれた。この世界の人たちはよく驚くなど思いつつ詳しく話を聞くと、普通冒険者はこんな丁寧な挨拶をしないそうだ。

だが、数日とはいえ寝食をともにするし、何より依頼主なのだから、最低限の礼儀はわきまえないといけないのではないか？ 他の冒険者はどんな態度をとるのだろう？ 俺は商人と、どんな道を通るのかといった雑談をして、他の冒険者が来るのを待つことにした。

しばらくしたら、こちらの馬車に若者たちがやってきた。一緒のパーティーらしくまとまって歩いている少年二人と少女一人の三人と、少し離れたところに見覚えのあるやつが一人だ。一人の方は、ゴブリン討伐のときに知り合ったニツクだ。

「よう、ミーツのおっさん。あんたもこの依頼を受けたんだな。あんたがいると思うと心強いぜ。依頼主の商人さんよ、俺はニックだ。よろしくな」

ニックが挨拶を簡単に済ませたことに驚いた。そんな簡単でいいのか。まだ若いからだろうかと思っ

思っている、三人組も商人に挨拶をする。

「俺はモブだ、よろしくな。ニックも久しぶりだな」

二人の少年のうち年長の方の彼は、見た目十代後半つてところか。一緒に召喚されたあの高校生たちと変わらない年頃に見える。

「僕はボケです。モブの弟です。よろしくお願いします」

おそろおそろといった様子のこの子は、可愛い感じた。多分、歳は十四〜十五くらいだろう。

「私はビビです。二人とは幼馴染で、みんなランクはEです。パーティ名はまだ決めていません」

ボーイッシュな女の子は、モブと同じくらいの歳だろうか。彼よりも丁寧には話してはいる。それにしたって、どの子も依頼主への挨拶が簡単すぎた。依頼主の商人も特に気にしていないようなので、やはりこういう態度が普通なのかもしれない。だが、俺は変わらないでおこう。

「先程、依頼主の商人さんには挨拶したけど、君たちにはまだだね。俺はGランクで、ミーツと言います。護衛の期間よろしくね」

ニックも含めてみんなに挨拶をすると、三人組が「こんなおっさんがGランクだって」とクスク

ス笑い出す。まあ護衛がしつかりできさえすれば関係ないかと、口にはしているのを無視した。

「おっさん、Gランクだったのかよ。あれだけのことができるのに、本当にGなのか？ とうか、その格好はなんだ。イカしてんのか」

「ほれ、ランクを示す首飾りだって、Gランクの灰色だよ。この服イカスだろ。気に入ってるんだ」服で隠れていた首飾りを出してみせると、ニックが少し引きつった笑顔になる。どうやら本当にGランクだということに驚いているようだ。

「あ、ああ。とにかく俺はあんたの実力を知ってるから、頼りにしてるぜ！ ちなみに俺はCランクだ。あ、護衛中はいいけど、それ以外のときはあまり近くに寄らないでくれよ。行った街や村で、おっさんと仲間だと思われたくないからな」

ニックの言葉に少しショックを受けたが、彼とは会って間もないし仕方ないことだと気持ちを切り替えた。

ふと三人組を見れば、その言葉を聞いて目を丸くしている。おそろく、俺が使いものにならないと思っていたんだらう。Gランクと聞けば、そう思うのは無理もない。

そうして挨拶が終わったところで、依頼主は馬車に乗り込み手綱を握る。俺たちは馬車と並走しながら、冒険者の門を何事もなく通過し、まっすぐな道を進んだ。

しばらくは景色を眺めたりしつつ走っていたが、だんだんと退屈になってきた。何も変化が起き

ずただひたすら走るだけなので、時々あくびが出てしまう。

「いっそのこと魔物でも出てくれないかな、などと不謹慎なことを考えていたら、ニックが背後から肩を指先でトントンと叩いてきた。」

「おっさん、暇だろ？ 多分、もう少ししたら休憩になるから、組み手に付き合ってくれよ」

少しでも眠気を解消できたらいいと思つて、二つ返事でOKした。実は俺は、異常に上がったステータスのせいで、小走りをしていてもあまり疲れなくなっていたのだ。

「では、そろそろ休憩にしましょうか」

先程ニックの言った通り、依頼主が馬車を止めて休憩をとろうと言ひ出した。その言葉を聞いた若者三人は息を切らし、地面に座り込む。

俺とニックは余裕綽々で、組み手のために馬車からある程度距離を取った。

「さて、どうするんだ？」

「普通に素手でいいんじゃないか？」

「そうか、それならいつでもいいよ」

「お、おっさん言うねえ。じゃあ、まずは小手調べから行かせてもらうぜっ！」

ニックは俺との距離をだいぶ空けてから、ダンク姐さんほどではないが、ダダダダダッと左右に小刻みに走って攪乱しながら近付いてきた。

俺の顔面を狙つて拳を振り上げてきたので軽く避けると、ニックは「えっ？」という顔をした。

この程度だったら余裕で対処できそうだ。お返しにダンク姐さんのデコピンで、額を軽く弾いてやる。

「おい、おっさん！ この前ゴブリンと戦ったときの動きと全く違うじゃねえか！ あれは手加減して戦っていたのか？」

「いや、あのときはまだレベル1だったし、全力でやってたよ」

「は？ あれでレベル1？ 冗談言つてんじゃないやねえよ！ 俺が若僧だからって舐めてんな！」

怒つたニックは、拳を握りしめ、また同じダッシュで迫ってきた。彼こそ先程は本気ではなかったのだろう。動きが速くなつてきた。

だが、ダンク姐さんと比べればまだまだ遅い。動きがハッキリと見える。

今度は顔面を殴ると見せかけてボディブローをしようとしているのか、ニックの拳は顔の方に向かっていたが、目線が俺の腹に向いている。少しずつ拳の軌道が変わり、腹に当たろうという瞬間、俺はニックの拳を掴んだ。

そのままゆっくり力を入れて握ると、ニックはもう片方の手で顔を殴ろうとしてきた。だが、それも掴み取り、同じように力を入れて握りしめた。

「痛たたたた、参った！ 降参だ！」

「え？ もう終わり？」

「なんだよ、その力！ 俺の拳を見てみるよ、おっさんの力で真っ赤になってるだろうが！ ほら、くつきりと指の痕^{あと}がついてる。今回は俺の負けだけど、この依頼が終わるまでには絶対に勝つてやるからな！」

「え、今日だけじゃないの？」

「勝ち逃げは許さない！」

正直、このレベルの組み手だったらあまりやりたくないのだが、勝ち逃げは許さないと言われれば、明日か明後日にでも再挑戦を受けざるを得ない。さすがに、ニックもあの程度で終わるはずはないだろう。俺も自主的に筋トレと、あとは一人で魔物でも倒しておこう。

「おっさん、もう俺とやりたくないと思ってるな？ 考えてることが分かるのが、なおさらムカつくぜ。俺の実力はまだこんなもんじゃねえからな！ 絶対、俺と組み手をしてよかったと思わせてやる！ ……って、そろそろ休憩が終わりそうだな」

ニックの言う通り、馬車から降りて腰を伸ばしたり屈伸運動をしていた商人が、馬車に乗り込んで出発の準備を始めていた。そして少しすると、こちらにやってくる。

「この先に森があります。そこをこれから休憩なしで通り抜けますので、魔物や盗賊の襲撃に注意しながらついてきてください」

商人はCランクであるニックではなく、一番ランクが下の俺に言った。ランク的に初めての護衛依頼である俺が何も知らないはず、と配慮してくれたのだろう。

「分かりました。ニック、聞いた通りだ。もしニックの手に負えないような魔物が出たら、俺が相手をするから、そのときは馬車と商人さんの護衛を頼むな」

「言われなくてもそうするぜ。おっさんと違って、モブたちと俺は何度も護衛の依頼をこなしてきたんだからな」

ニックは余裕な様子だが、人間こういうときこそ気をつけないといけないことを元の世界で経験しているから、しっかりと警戒していようと気を引き締めた。

しばらくして、何事もなく森の入口に着くと、御者をしている商人が、ここから少しスピードを上げると言った。俺は了解し、すぐに追いつくので先に進んでいてほしいと断りを入れてから、森の入口でストレッチをした。

今までは小走りだったが、体力的には早歩きするのとあまり変わらないため、使っていない筋肉が多い。何か起きたときに、この若くない身体が瞬時に動かないと困るしな。念入りに五分ほど身体をほぐしてからダッシュすると、三十秒ほどで馬車に追いついた。

そこは鬱蒼^{うつそう}とした森で外の光もあまり入ってこず、それまでの道よりも薄暗かった。

「え！ おっさん、ついさっきまで後ろにいなかったよな？ あんた何者なんだ？」

「しがないただのおじさんですよ」

俺があつという間に追いついたことに、馬車の後ろを走っていたモブが驚きの声を上げる。しかしそんな驚きも、突然魔物が馬車を挟むかたちで両側から現れたことで、うやむやになった。

現れたのは、ゴブリン四体とホブゴブリン三体だ。

ホブゴブリンとは大きいゴブリンの種で、普通のゴブリンは身長百二十センチほどしかないが、ホブゴブリンは百六十五センチくらいある。小学生と大人くらいの身長差だ。

また、見た目も少し異なる。ゴブリンは歪な鼻にポロポロの歯で、いつも口を開けて涎を垂らしているが、ホブゴブリンは筋肉質で、竹まいも成人男性とほぼ変わらない。知能が高いのだ。

だけど、どちらも肌の色が緑色をし、白目のない真っ赤な瞳が特徴的だ。もちろん、ホブゴブリンの方がはるかに強い。初めて戦うのがホブゴブリンだったらヤバかったかもしれない。

ゴブリンは素手か、木から折ったばかりのような枝を持ち、ホブゴブリンは錆だらけの剣を握りしめ、俺たちに襲いかかってきた。

ゴブリン四体を若者パーティとニックに任せ、俺はホブゴブリン三体の相手をする。

ゴブリンもホブゴブリンも馬車の進行方向からやってきていた。馬車は一時停車して、商人には中に入ってもらおう。

「さて、ニックたちからこつちは見えてないだろうから、魔法を使っても問題ないだろう」

想像魔法でホブゴブリン二体の周囲の空気を圧縮して、見えない檻を作る。残り一体は自由にさせておく。実力で倒そうと考えたのだ。

まず、短槍を素早く腰紐から抜き、ホブゴブリンの身体を軽く突いた。短槍の刃はすんなりその胴体を貫く。ホブゴブリンは断末魔の叫びを上げて息絶えた。

あっさり一体倒してしまったので、残り二体もさっさと片付けようと振り返ったところ、二体とも苦しそうに顔を歪めて死んでいた。

「え？ なんで？」

空気を圧縮した檻は中が真空になっていると後で気が付いたが、このときは不思議でしかたがなかった。

第二話

初の護衛依頼での戦闘が終わって馬車へ戻ったら、少年の一人がまだ戦っていた。あの子は確かボケと言ったな。その可愛い男の子はゴブリンと一対一で戦っていて、残り三体は既に倒され

ていた。ポケの兄モブは腕を組んで戦いを見守り、ビビは眠そうにあくびをしながら、モブ同様ポケを見ている。

加勢してあげようかとも考えたが、仲間の様子からすると、おそらくポケを鍛えようとしているのだろう。だから、ひとまず見守ることにした。

しかしこういふことつて、護衛の依頼中じゃなく、自分たちだけで行動しているときにやるものじゃないのか？

とりあえず馬車にいる商人に外から声をかけて、ホブゴブリンは倒し終え、ゴブリンももう少しで片付くだろうと伝えた。

馬車のすぐそばで待機していたところ、ニツクが少し驚いた表情をして近寄ってきた。

「おっさん、もう終わったのか？ ホブゴブリン三体なんて、俺でもそんな短時間じゃ倒せないのに、どうやったんだよ」

「一体はこの槍で倒して、でも残りの二体はなんで死んだか分からなかった。魔法は使ったけど、致命傷を与えるようなものではなかったんだけどな」

「なんだそれ、どんな魔法を使ったんだ。次に魔物が現れたら見せてくれ」

ニツクは、俺が魔法を使えることを知っている。

「うーん、じゃあ次の組み手のときにでも、ニツクに使ってやるよ」

「いや、ホブゴブリンが死ぬほどの魔法を人に使っちゃダメだろ！」

ニツクにもつともな突っ込みをされた。それじゃあ次に魔物が出たときに、覚えていたら見せてみることにしようか。そんな話をしているうちに、あたりが静かになった。

「お、ポケがやっと倒せたみたいだ。いつもは兄貴のモブが魔物を弱らせてから倒していたみたいだけど、今日は最初から自力で戦っていたんで、こんなに時間がかかったんだな。こんな戦いは依頼を受けてないときにやってほしいもんだぜ」

「あ、やっぱり？ 俺も同じことを考えてたんだけど、俺が知らないだけでこういう戦いはよくあるんだと思ってたよ」

「んなわけねえよ。普通は護衛対象の安全を最優先に考えて、早く魔物を退治しなきゃいけないに決まってるだろ」

さすが、伊達にCランクではない。考え方がしっかりしている。

ポケがゴブリンを倒して一息ついた頃を見計らって、商人は鞭を打ち再び馬を走らせた。

それからは鬱蒼とした森を何事もなく通り抜けることができた。その間も、商人は何度も馬を鞭で持った。途中で何度かゴブリンやホブゴブリンを見かけたが、馬車の後方を走っていた俺がその辺に落ちている石や枝を投げつけて倒した。

森を出たところで、全力で走っていた馬はさすがに疲れたらしく、ひどく辛そうに息をしながら、

なおも鞭を打つ商人を無視して道から外れた。

馬についていくと、川にたどり着いた。馬は川に顔を突っ込んで、ゴブゴブと水を飲み出す。

俺たちも、あたりを警戒しつつ軽く休憩を取ることに。すると商人が、今夜はこの場所で野営をする伝えてきた。依頼主側としてはもう少し進みたかったようだが、馬が言うことを聞かないので諦めたそうだ。

野営といっても、商人と冒険者全員が一緒に行動するわけではなく、それぞれが勝手に食事を取って休むかたちだ。商人は馬車の中で革の水筒を片手に硬そうなパンをかじっており、モブたち三人は干し肉を薄くスライスしてパンに載せ食べていた。ニックは薬草を干し肉で包んだものを食べている。

俺も一応パンを持ってきているが、干し肉などはない。だが魔法でプリンやゼリーが出せるなら、メシも出せるのではないかと考え、岩の陰に隠れて想像魔法を使ってみた。

想像したのは、某有名な安くて美味しいハンバーガーである。

最近は何のせいか、食べると胃もたれすることが多くて敬遠していたが、たまに猛烈に食べたくなる時がある。

今がまさにそのときだった。だからリアルに想像はできたが、魔力が足りるかどうかが問題だ。

魔力を循環させつつ練るが、まだ出てくる気配がない。前にギルマスのグレンに言われて万能薬

を出そうとしたときは、今の実力では出せそうにないのが早々に感触で分かった。

でも、今回はどうにか出せそうな手応えがある。両の手の平を上に向けて構えていたら、手の平の上にパアッと薄く青白い光が生まれた。光が収まったあたりで見ると、二枚のチーズが入ったハンバーガーが、手の平から次々に出てきた。

慌てて風呂敷を広げて置いていくが止まらない。どうしよう、魔力を練りすぎたんだろうか？原因が分からないままに焦った。

「おーい、ニック、来てくれないか？ ニックだけでいい、急いで来てくれ！」

思わず大声で呼ぶと、上手くニックだけ来てくれた。よかった、若者たちが俺に無関心で。

「どうしたんだ、おっさん。クソでもして、手に付いたか？ って、なんだこりゃ」

ニックが岩の上から俺を覗き込み、この現状を見て目を丸くした。それはそうだ。

「とりあえず、これを片っ端から食ってくれないか？ 味は保証する」

なるべく平気な顔でお願いしたつもりだが、俺の頬は引きつっていたに違いない。ポコポコと増え続けるハンバーガーは、百個くらい出たところでようやく止まった。

残りのMPが、ギルドの訓練場で倒れたとき以来のヤバさになっている。ニックはハンバーガーを次から次へと食べていくが、三十個くらいでついにギブアップした。

俺も食べるが二個で腹一杯になってしまったため、残りの七十個近くを風呂敷に包み、仕方なく

商人と若者たちに食べてもらうことにした。

商人と若者たちは顎が外れるんじゃないかと思うくらいに口を開けて驚愕している。もう面倒くさくなったので、色々聞かれる前に、先に伝えておく。

「同じ依頼を受けてるよしみで、よかつたらあげるよ。商人さんも、どうぞ食べてください。ちなみにこれについては説明する気はないので、詮索しないでくださいね。ニックも同じだからな？」

「あ、ああ、分かった」

ニックは苦しそうに腹をさすりながら答える。若者たちもココココと頷き、そしてハンバーガーに手を伸ばすと、勢いよく食べはじめた。あんなにたくさんあったのがあつという間になくなった。若者は食欲旺盛でありがたい。

夜になり、焚火をしつつ見張りをしようとしていたら、ニックとモブ、ポケ、ビビがやってきて、俺に夜の見張りをしなくてもいいと言ってくれた。美味しいものをくれたお礼だそうだ。

その言葉に甘えて休むことにしたが、歳を取るとそんなに長い時間寝ることもできなくなる。

二、三時間くらい寝たところで目が覚めてしまい、再び寝ることもできそうになかったので、起きて焚火の方へ行ってみた。この時間の見張りは女の子のビビだった。

「ビビさん、交代するよ。俺はもう充分寝たから、君も明日に備えて寝なよ」

「いえ、まだ私の番になったばかりなので大丈夫です」

ビビは俺の方をチラリと見たが、すぐそっぽを向いて交代を断った。真面目だなあと何気なく空を見上げると、満天の星が輝いていた。まるで自分が宇宙の真ん中にいるのではないかと錯覚するほどの光景だ。

今まで色々ありすぎて空を見上げる余裕なんてなかったから、凄く感動した。

感動していたら、ビビが話しかけてきた。

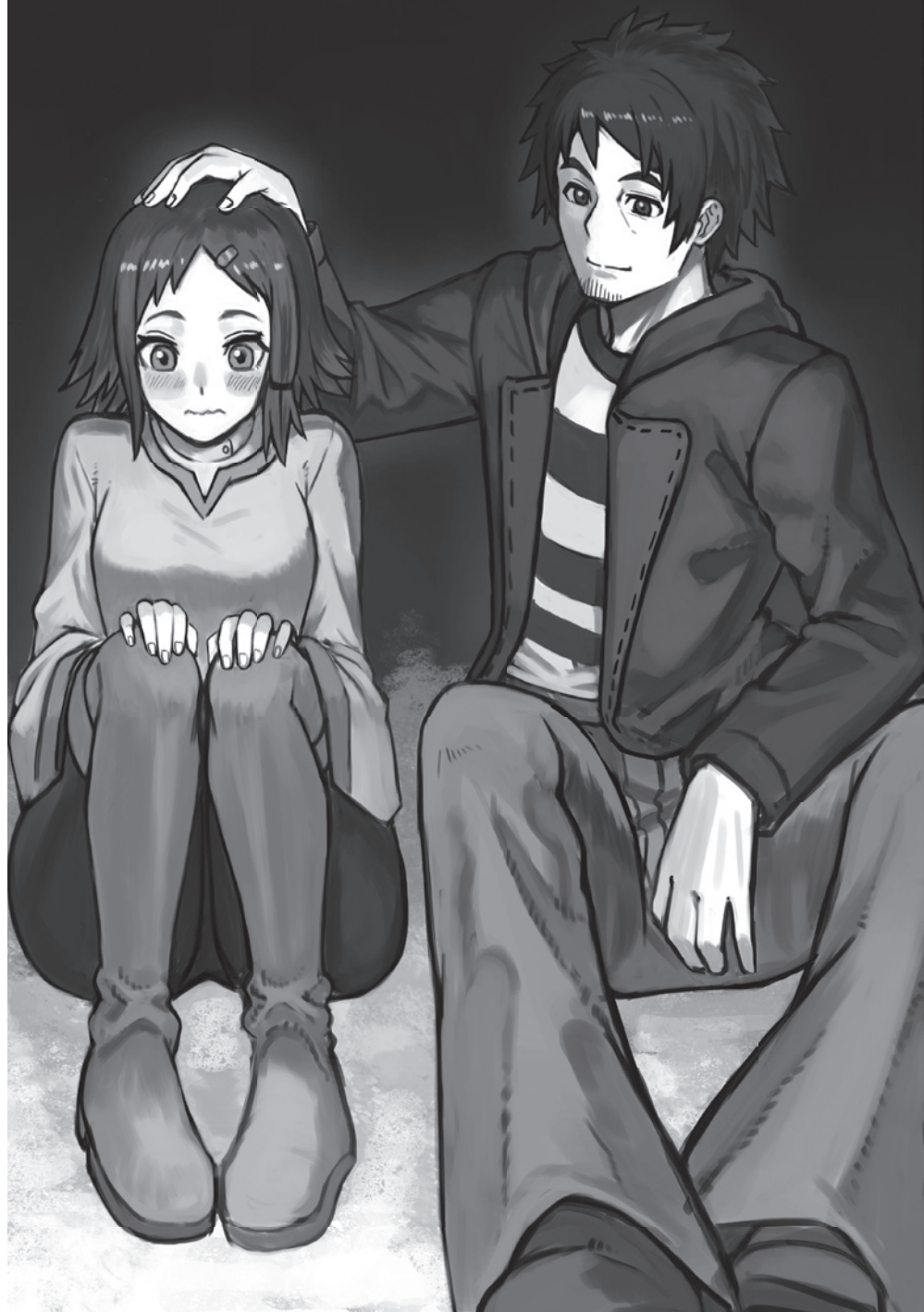
「あの、今日は本当にありがとうございました。美味しいものを食べさせてくれただけじゃなく、ホブゴブリンを倒してくれて。あれは私たちでも苦戦していたと思います。もしかしたら、ポケが死んでいたかもしれないです」

ボーイッシュなビビは黙っていれば男の子に思ってしまうような見た目だが、喋るとやっぱりちゃんとしている。

それだけに、依頼主に挨拶をしないあの態度はもつたいたない。だが、もしかすると、そういうことを教えてくれる人が周りにいなかったただけかもしれない。

俺はビビの隣に座り、思わず彼女の頭を撫でていた。

しかし、年頃の女の子に軽々しく触るなんて、決していいことではない。やっちゃったとすぐに手を離して、おそろおそろビビの反応を見ると、恥ずかしそうに俯いている。



セクハラで訴えられるかもとか、勝手に頭を撫でるなんてと殴られるかもとか考えたが、ビビは何も言っていない。ひとまず安心したが、一応、勝手に触ってしまったことは謝ろう。

「ご、ごめんね。嫌だったね。こんなおっさんに頭を撫でられるのは」

「全然嫌じゃないです。逆に嬉しいです。私たちは孤児で、頭を撫でてくれるような大人はいなかったのです」

ビビは頭を横に振っていた。

そういえば、シオンが冒険者は孤児が多いって言うていたのを思い出す。やっぱり、色々なことを教えてくれる大人がいなかったんだな。ならばこの依頼の間にも、人への接し方や、依頼主に挨拶あいさつくらいはした方がいいことを伝えてあげよう。

それからビビと色んな話をしていたら、モブが起きてきて、眉間に皺しわを寄せて睨にらんできた。なるほどそうか、そういうことか。分かりやすいやつだ。

「モブくんもビビさんも、俺はもう寝ないから、寝ていいよ」

「私に『さん』はいらないですよ、ミーツさん」

ビビは俺に対して、いつの間にか親しげな口調になっていた。それを聞いたモブが俺を怒鳴りつけるため大声を出そうとする気配がしたから、咄嗟とつさにそばに寄ってその口を手で塞ふさぐ。そして、耳元みみもとで囁ささやいた。

「みんな寝てるから、大きな声を出すのはやめような。文句があったら明日の休憩のときでも組み手に付き合うよ?」

そう言って彼の目を見つめると、今にも俺を殺しそうなくらいの強さで睨み返ってきて、ボソリと「殺してやる。ビビに近付くな」とだけ言った。手にはナイフが握られている。

しかし、モブの手首を掴み少し力を込めると、ナイフは彼の手から落ちて地面に刺さる。モブは俺を睨んだまま舌打ちをした。

「チッ、分かった。明日だな、明日殺してやる」

モブは身体力をゆるめ、今は戦う意志はないと、空いているもう片方の手を上げる。それを確認して、俺も手を放してモブから離れた。

モブは自身が持ってきていたマントを羽織り直してその場に座り、俺を睨んだままあとは微動だにしない。

そんなモブを気にしながらビビのところへ戻ると、彼女は驚いていた。

「ミーツさん、凄い! モブのところまで馬三頭分くらい離れてたのに、あつという間に移動しちゃうなんて。ミーツさん、本当にGランクですか? レベルはいくつ? 冒険者になる前は何してたんですか?」

ビビから質問攻めにされるが、答えにくいことばかり聞かれてしまって、返事に困る。

とりあえずレベルを確認すると、レベル15になっていた。なんとなく、他のステータスの表記はまだ見たくないの、目標レベルをシオンと同じ50にして、そこに到達したら見ようと決めた。

「ビビもお休み。明日はモブと組み手をするから、ビビもよかったら参加しなよ。だから明日のためにも、休めるときに休みなさい」

今度は素直に言うことを聞いて、まだこちらを睨んでいるモブのところまで小走りで行き、彼が羽織っているマントを受け取ってゴロンと横になる。寝付きがいいのか、そのまますぐに寝息を立てはじめた。モブはそれでも俺を睨みつけていたが、俺がビビやモブから視線を外すと、弟のポケと一緒に布にくるまって、やっと眠りについた。

夜間の見張りといってもすることはなく、あたりに魔物や盗賊が現れないか警戒するくらいで正直暇だ。暇すぎて、見張りを買って出しておいて、寝てしまえばいいことになる。

仕方なく、想像魔法の可能性でも検証しようと前にギルドの訓練場でやった指先から火が出る想像魔法を試していたら、気付けば十匹ほどの狼が近くにきており、唸り声を上げていた。

突然でびっくりしたが、すぐに気持ちを切り替えて短槍を素早く持ち、狼を突き刺していく。結局、ものの数秒で終わってしまった。今回は身体能力のみで倒すことができた。

狼の毛皮を剥いで肉と毛皮に分けようと、ナイフを取り出して狼に突き刺す。すると、先程まで生きていたことを知らせる、嫌な温かさを手に感じる。

でも毛皮は依頼主の商人に渡せば喜ぶだろうし、いい暇潰しができたと思うことにした。まだ血も流れるし、川でやった方がいいんだが、ここから川までは少し距離がある。だから想像魔法を使って水を出しつつ、洗っては削ぐといったことを繰り返していく。こうして、狼の解体に時間をかけるうちに、夜が更けていった。

第三話

夜が明けて、一番に起きてきたのはニックだった。

「やあ、おはようニック。……黙り込んでどうしたんだ？」

「それは、こつちのセリフだぞ。これどうしたんだ？」

ニックが寝起きの眠そうな目で見たものは、積み上げられた狼十四分の毛皮だ。

肉も別に分けていて、骨だけ魔法で地面に穴を掘って埋めた。動物の毛皮を剥いだのは初めてだったので、最初の一匹は失敗したが、残りの九匹はなんとか見られるくらいには剥ぐことができた。まあまあのお出来で自己満足に浸っていたところに、ニックが起きてきたのだ。

「みんなが寝静まった後に襲ってきたから、全部倒して暇潰しに毛皮を剥いでみた」

「暇潰しでこの数かよ……」

俺の言葉に、ニックは呆れた顔をする。しかしすぐに諦めたのか、俺の横にどかっと座った。

「なんで、おっさんが見張りしてたんだ？ 最後はビビかモブのはずだぞ」

「ビビの当番のときにたまたま目が覚めて、もう寝られそうになかったから代わったんだよ」

「ビビはよく交代したな？ あの子は真面目だから、絶対自分がやるって言いそうだけど」

「最初は代わらなかつたよ。でも雑談してるうちにビビと仲良くなつてね。明日のためにも休んだ方がいいって言ったたら、大人しく交代してくれた」

「夜に何があつたんだよ！ まさか、ビビとヤツたのか？」

「なんでそうも下衆いことを考えられるかね。普通に会話して仲良くなつたと思えないのか？」

「だってあのビビがなあ」

今更だが、ビビってどういう子なんだろうか。真面目な子なのは見ていて分かったが、それ以外ではどうなんだろう。戦闘についても、モブ同様ビビの動きも見えていないが、それは今日の組み手のときに分かるか。

「あ、そうだ。今日の休憩はモブと組み手をするから、悪いけどニックとはできないよ」

「え、なんでだよ！ なんでそういう話に——」

「ミーツさん、おはよう」

ニツクの文句を遮るように、依頼主の商人が声をかけてきた。

「おはようございます！」

立ち上がって俺も挨拶を返すが、ニツクは座ったままこちらを向きもしない。

「こら、朝の挨拶くらいしろよ、ニツク！」

「普通しないって」

ニツクは俺の注意に、不貞腐れたようにブスツとしている。

彼みたいな、ランクが上の冒険者のこういう言動をするのを見て、モブたちも学ぶんだろう。だから挨拶をしない態度がよくない冒険者が増えるんだ。

そこにビビも起きてきて、なんと俺たちに挨拶をした。

「おはようございます。ミーツさん、商人さん、ニツクさん」

「な！ どうしたんだよ、ビビ。お前、挨拶なんてしたことないじゃないか」

「ニツク、これが人の本来あるべき姿だよ。先輩冒険者が率先して見せてあげるべき姿なんだよ」

「おっさんの入れ知恵か！」

「確かに俺の助言だが、こうすることで依頼主との関係が良好になるなら、その方がよくないか？」
「まあそうだけども……。でも、俺が今まで見てきた冒険者は挨拶なんてしてなかったし、しなくてもいいみたいなのも言っていたんだが」

やっぱり、他の冒険者もしていかないか。それでも、ニツクやビビがこの先していくことによって、他の冒険者も真似するようになればいいなと思う。

その後、ニツクたちと話していたら、モブとポケも起きてきた。もちろん二人とも挨拶はしなかった。でもポケは、モブとビビが挨拶するようになったら自然と真似しそうだ。

とりあえず今日は、モブに組み手と称して色々と躰を試してみよう。モブの方は、俺を殺す勢いでくるだろうけど。

俺がこういうことを考えているのをシオンに知られたら、「ミーツのくせに偉そうに！」と言われそうだな。想像するだけで笑ってしまう。

「みなさん起きたようなので、準備ができ次第出発しましょうか」

依頼主である商人の言葉を合図に、モブとニツクは寝るときに使った布や道具を急いで片付けていく。俺はというと、依頼主を呼び止めて昨夜の話をした。

「昨夜、狼を倒して毛皮を剥いだんですが、どうされますか？ ついでに肉もあります」

「それでしたら買い取りますよ。でもいいんですか？ ご自身でギルドに売らなくても」

「いいですよ。あまり荷物になるものを持ち歩きたくないですからね」

先程ニツクに見つかつた後、モブたちには見られないように風呂敷に包んでおいた毛皮と肉を、商人の前に出してみせた。

「え、こんなにですか？ 一人で倒したんですか？」

「そうですね、弱かったから簡単でしたよ。毛皮を剥ぐ方が大変だったくらいです」

「よくお一人で倒しましたね。おっ、これは、このあたりでよく出る狼の魔物とは違いますね。少し高めに買い取らせてもらいますよ」

「お、マジですか？ 一昨日ちょっとした出費があったので、嬉しいです」

立て替えた、あの高校生たちの十日分の宿代が金貨一枚銀貨四枚だったのに加えて、俺の留守の間に払っている宿代もあつて結構な出費をしていたから、正直かなり助かる。一体どのくらいで買い取ってくれるのだろうと、ドキドキした。

「では、金貨一枚と銀貨一枚でいいですか？ 内訳は毛皮で金貨一枚、肉で銀貨一枚です。肉は筋ばっかりで硬くて美味しくないのです、目的地の村で干し肉用に売るつもりです」

「もちろん構いません。ありがとうございます」

あんな狼の毛皮と肉で金貨と銀貨一枚ずつにもなるなんて、びっくりだ。無事、商人に狼を売って金を受け取ったところで、ニックたちの準備が整ったらしく、移動を開始することになった。

また小走りで馬車についていくが、昨日より今日の方が疲れがないことに気が付いた。

昨夜の狼との戦いでまたレベルが上がって、とんでもないステータスになっているんだろうかと思つたが、ひとまずこの依頼の間は考えるのをやめた。

街道に戻り、しばらく走っていると、馬車が急に停まった。

俺は馬車の横を走っていたが、その理由は分からなかった。

すると、反対側を走っていたニックがこちらに来て、小声で盗賊だと教えてくれた。まだ姿は見えないが前方にいるらしい。今現在、別の馬車の略奪が行われているようなのだ。

「ニック、なんで気が付いたんだ？ そういったスキルを持つてるのか？」

「そうだな。スキルもだが、あとは経験だな」

「しばらくここにおいて、やり過ぎせるか様子を見ましようか」

商人はニックと俺に、そう提案した。でも俺は商人に尋ねる。

「商人さん、護衛のためにみんなをここに残しますので、私だけ様子を見てきてもよろしいでしょうか？ 相手が倒せるくらいの実力なら倒してきますし、無理そうなら遠回りして逃げるんで、ダメでしょうか？」

「いいですよ。このままここにおいても、どのくらいかかるか分からないですから」

ダメ元で聞いてみたが、案外簡単に許可が下りた。

「ニック、冒険者が盗賊を殺した場合でどうなるんだ？ 何か処分的なことってあるのかな」

「ないな。盗賊は捕らえられれば処刑か、罪の軽いやつでも鉱山送りや辛い仕事に回されることに

なるから、いつそこで殺してやるのが一番だぜ」

「分かった。なら俺が様子を見てくるから、ニツクはこの護衛を頼むな」

ニツクに商人の護衛を頼み、盗賊たちのもとへ全力疾走した。三秒ほどで馬車らしきものが見えてくる。意外と近くだったんだなと思いつながら木に隠れて覗いてみると、本当に略奪が行われていた。

馬車の横の地面に、六人の人間が転がっている。成人男性四人と、性別不明だが老人二人のようで、既に殺されているのか微動だにしない。馬も殺されていて、荷台から荷物を持ち出している盗賊たちが何人いるかは数えきれなかった。

他に生存者はいないかと見渡す。すると、女性を四人見つけたが、彼女たちは今まさに複数人の盗賊に犯されようとしていた。

これは助けに行くべきだろうと思ったとき、俺は盗賊たちに見つかり、囲まれてしまった。

「テメエはなんだ、旅人か？ 有り金全部よこしたら、命だけは助けてやってもいいぜ。げへへ」

「お前、前にもそう言つて金取つた後、殺したじゃねえか、がははは」

「バラすなよ。殺す楽しみがなくなるだろうが！ げへへ」
盗賊たちは俺を見て、にやにや笑う。

最悪だ。なんでこんなひどいことが平気でできるんだ？ 俺は呆然としてしまう。

これから犯されようとしている子と目が合い「助けて！」と大きな声で言われた。しかしその子は目の前にいる盗賊に頬を叩かれ、あげく首を絞められて殺されてしまった。

それを見て俺は頭に血が上り、キレた。これまでの人生でキレたことはそう何度もないと思うが、中でも記憶がなくなるほどにキレたのは初めてだ。

気が付いたら、盗賊たちは皆殺しにされていた。どうやら俺がやったようだ。

頭を槍や剣で貫かれた者、胴体を裂かれた者に、下半身丸出しで胴体と脚が分かれている者もいた。盗賊たちの身体はバラバラになっていて、どうにか数えると全部で十五人もいた。

我に返つて自分の身体を見れば、手は真っ赤に染まり、頭から血を被つたかのように全身真っ赤に染まっていた。そんな俺を見て、襲われていた女性が怯えた表情で震えている。よほど俺のことが怖かったのだろう。

とりあえず身綺麗にしたくて、自分自身に清潔になるような想像魔法をかける。

そして俺は女性に近付き、彼女たちにも想像魔法で綺麗にした。みんな服や髪が泥だらけな上に、返り血なのか血も被っていたからだ。

「ありがとうございます」

助けたことと身綺麗にしてあげたことにより、三十代前半くらいの年長者らしき女性がお礼を

言った。話を聞くと、襲われたのは次の村に向かう途中の乗り合い馬車で、殺されてしまった男のうちの二人は護衛だったらしい。

女性と話をしていたら、ニックと商人たちがやってきて、この惨状を見回した。

「おっさん、これ、あんたがやったのか？」

「あ、ああ。人生で初めてブチ切れて、やってしまったらしい」

「らしい？ 記憶がないのか？」

「ああ、ほとんどない。男も老人も既に殺されていて、しかも若い女性が目の前で殺されてしまったのを見て、頭に血が上がった。それからの記憶が曖昧だ。俺にとつて縁もゆかりもない人たちだが、眼前で人が殺されるのを見るのは初めてのことだったからね」

ドラマや映画ではそんな場面も数多く見てきたが、現実にも目の前で人が殺されていく様は生々しく、今思い出しても震えてしまうほどだった。助けるためとはいえ、自分も同じことをしてしまっただけだが。

「とりあえず、遺体は埋めましょう。血の臭いで魔物たちが寄ってきますので」

一人で思い出しながら身震いしていると、商人が提案してきた。

「私にやらせてください、この惨状は私の責任ですから。そうだ、殺されてしまった男性や老人のお連れの方がいたら、別れを言ってあげてください。彼らも埋めますので」

俺は盗賊たちの遺体を挿んで、草木の生えていない土の上に放り投げた。そうして盗賊たちの遺体を積み重ね、想像魔法で火をつける。しかし数が多いからかあまり燃えない。今度は強めに炎を出せば、盗賊たちの死体は巨大な火柱に包まれてしまった。

俺がやっていることだが、証拠を隠滅するかのよう燃やしていく。人間の焼ける嫌な臭いがしたが、自分のしたことだから仕方なく見守った。

そろそろ燃え尽きそうところで、女性たちが駆け寄ってきて、盗賊に殺されてしまった人たちの別れが済んだと伝えてくれた。彼らを埋める作業は、ニックとモブ、ポケ、ビビも手伝ってくれた。魔法で穴を掘ることもできるが、これは人間の手でやった方がいいと判断したからだ。

こうして予定外すぎる事態は終わり、生き残った女性たちも一緒に村へ向かうことになった。しかし商人の馬車は荷物でいっぱい、人が乗るスペースはない。無理すれば一人、二人は乗せられるかもしれないが、女性は三人いるため、みんなで歩くことにする。

村に着く頃にはもう日も暮れかけてたものの、なんとか今日中にたどり着くことができた。そこでようやく安心したのか、女性たちは泣いてしまった。

第四話

村に着いたといっても、正確にはまだ村の中に入っていない。なぜなら、村の門が閉まっている。村の周りは、丸太を積み上げて造られた壁に馬車がギリギリ一台通れる程度の木製の門があるが、門番らしき人は外にいない。

ニックが門を叩き、盗賊から救った女性たちと商人が来たとき大きな声を上げると、近くにいたらしき門番が姿を現して、やっと村の中に入ることができた。

女性たちはこの村の出身で、王都まで出稼ぎに出ていて、帰ってくる途中で運悪く盗賊と遭遇してしまったという。泣いて喜びながら、家族が待っている家々に帰っていった。

商人は護衛の依頼達成として、俺やニックたちが渡した木札にスラスラとサインをした。

「ミーツさんは初めての護衛依頼でしたね。説明しておきますと、通常、護衛依頼はギルドから渡されている木札に依頼主がサインして、依頼達成となります。報酬はギルドで受け取ってください。ところで、ミーツさんにすぐに帰らなくてはいけない用事がなければ、数日後の帰りの護衛もお願いしたいのですが。いかがでしょうか？」

「あ、私は構いませんよ。ニックとビビたちはどうする？」

「俺も構わねえよ。このままただ帰るより、報酬がもらえた方がいいからな」

「私たちもニックさんと同じです」

「どうやらみんな問題ないようだ。改めて、俺が代表して依頼主に返事をする。」

「商人さん、そういうことなので、帰りの護衛依頼も受けます」

「はい、ありがとうございます。ではその分は、帰ったときに追加でサインをいたします」

商人との話も終わり、夜も更けてきたので、俺たちも村の宿に泊まることにした。

「モブ、組み手は明日付き合おうから、今日はこのまま宿に泊まろう」

「フンッ、ああ、そうだな。明日がおっさん、あんたの終わりの日だ」

モブは弟のポケとビビを引き連れて、この町に来るたびに泊まっているという宿へ向かう。ビビはモブについていく前に、俺の方に来て頭を下げた。

「ミーツさん、ごめんなさい。明日はモブと一緒によろしくお願いします」

「ああ、大丈夫だよ。こちらこそよろしく」

「これは内緒だけど、今日ミーツさんが盗賊を全滅させたとき、モブはミーツさんを恐れてしまったみたい。だからといって、明日は手を抜かないでくださいね」

ビビはそれだけ言うと、小走りでモブを追いかけた。その間モブは少し離れたところでビ

ビを待つていたが、今にも斬りかかってきそうな勢いでこちらを睨んでいた。

「やっぱりビビはいい子だな」

「あいつがあんなことを言うなんてな。おっさんの影響か？ でもおっさん、ビビに惚れるなよ？ ビビに手を出したらモブに恨まれるぜ」

ニックがにやにやと俺を見てくる。何を言ってるんだ、こいつは。

「ニックは、俺が自分の半分も生きてない年齢の子を好きになると思うのか？ さすがにあんな子供を好きになるわけないだろ。それに、既にモブには恨まれてるよ。明日の組み手は俺を殺すつもりで来るだろうしね」

「おっさん、やっぱりビビに手を出したんじゃ……ってイッテエな！」

ニックがまたもゲスいことを口走ったので、頭を軽く叩いてやる。あまり強い力では叩いていないはずだが、ニックは頭をさすりながら涙目になっていた。

「ハハハ、ニックさんもミーツさんも面白いですね。さあ、完全に暗くなる前に宿に向かいましょう」

商人に促されて後をついていくと、今日助けた女性のうちの一人がやってきて、自分の両親が経営している宿に泊まってほしいと言ってきた。

ここはあまり広い村ではないが、宿は全部で三つある。次の村や街までかなり距離があるため、

冒険者や旅人はこの村に泊まる人が多いそうだ。

女性は、今回助けてくれたお礼ということで、無料で何日でも泊まっていけると言ってくれる。さすがに無料は申し訳ないと断ろうとするも、ニックと商人は食い気味にありがたいと受け入れてしまった。

こうなると逆に断りにくい。それでは一泊だけ甘えようと思つて、女性の両親が経営している宿にみんなで行った。

宿に着くと、女性の両親に、娘を助けてくれてありがとうと涙を流しながら手を握られ、感謝されてしまった。他に客がいる中でのことだったので気まずい空気になったものの、ちょうどその夕イミングでニックの腹が盛大に鳴り、一転この場は笑いに包まれた。いい仕事するな、ニック。

そして、宿の主人が食事にしましょうと言ってくれたので、俺たちは宿の食堂にてようやく温かい食事にありつけた。

温かい食事ではあったが、残念ながらからお世辞にも美味しいとは言えなかった。ほぼ透明なシチューのようなものに、少しカビの生えている硬いパン、そしてエールと呼ばれる炭酸が抜けたアルコールと、味の薄いビールだったからだ。

しかし商人やニック、他の客たちも、美味しくそうにバクバク食べて、中にはおかわりまでしている。俺はシチューもパンも一口食べたただけでもう無理だと思ひ、あとはニックに全部あげてし

まった。それでも彼らはまだ食事を続けているので、先に休もうと案内された部屋に入れば、ベッドが三つある部屋だった。

どうやら、商人とニックと三人でこの部屋に寝るといふことらしい。ガツカリしたが、無料で泊まらせてもらえるんだから贅沢は言っていられない。先にベッドに潜り込む。布団は普段から外に干しているのか、太陽のいい香りがした。気持ちよく眠れそうだ。

そうしてウトウトしていると、食事が終わったらしい商人とニックがドカドカと足音をさせながら部屋に入ってきた。ニックはベッドに寝つ転がるなり、すぐにイビキをかきはじめた。

商人はイビキこそかいていないが寝息が聞こえてきた。ニック同様に寝てしまったようだ。

俺は、せっかく眠りかけていたのに、ニックたちのせいで眠れなくなってしまった。

布団にくるまってスマホで時間を見ると、まだ二十一時だ。せっかくだから村の中でも見て回ろうかと部屋を出たのだが、宿屋の主人に、娘の命の恩人とはいえ村に馴染みのない男が夜に歩き回れば面倒なことになると言われ、諦めて部屋に戻った。ツイていないな。

昨夜から寝ていないから眠いはずなんだが、全然眠れない。とりあえずベッドに横になり、今日の出来事を思い出していた。あんなにプチ切れてしまったが、今は冷静に戻っている。

この世界では、ああいうことはこれから何度も経験するのだろう。その度にキレていたのでは、一流の冒険者にはなれないな。

悪党とはいえ初めて人間を殺してしまったのだが、なぜか後悔はない。罪悪感は多少あるが、多分キレて記憶が曖昧になっているせいだろう。今日は俺より劣る相手だったからよかったものの、俺より強い相手だったらと思うと、身体が震えてきた。

冒険者として正しい行動だったのかという疑問も湧いてくる。たとえ依頼主の許可を得たとはいえ、護衛対象を放つてその場を離れたのは、冒険者として、大人としてよかつたのだろうか？

もしあそこで俺が死んだら、護衛対象の商人は危険な目に遭っていたはずだ。もしかしたら、商人やニックにあの若者たち、全員が死んでいたかもしれない。それだけのことを俺はやったんだと今更気付き、反省した。

次の依頼はちゃんとこなそうと心に決めたところで、結論が出たからかなんとかなく眠気が来て、俺が重くなり、やがて俺は意識を手放した。

次に目を覚ましたとき、枕元に置いていたスマホを見れば午前二時だった。どうりで窓の外はまだ真っ暗だ。商人やニックはまだ寝ているみたいだが、俺はさすがにもう寝ることができず、何か暇潰しはないかと考えるけれど、やっぱり想像魔法しか思いつかない。

仕方ない、布団を頭まで被って、想像魔法で遊んでやろう。

夕食をほとんど食べていないし、食べものでも出そうかと思つたが、ニックたちに匂いでバレそ

うだからやめた。そうだ、いつも出している水を自在に操れるかの実験をしてみよう。

いや、待てよ。もしできなかった場合、ベッドは水浸しで小便を漏らしたみたいになってしまうかもしれない。この実験も、後日それにふさわしい場所でやろうと考えを改めた。

それではと、今度は宙に浮くことができるかの実験に取りかかったが、案外簡単にできてしまった。

この世界に来る前から、空を飛びたいとか宙に浮きたいといった想像はしていたので、イメージがしやすく、想像魔法によって余裕で空中遊泳ができた。

宙に浮いているとき、暗くてよく見えなかったが、ニックと目が合ったような気がした。ニックは夢だと思ったのかなんのか分からないが、すぐに寝返りを打ってまたイビキをかきはじめる。

俺は、もし本当に見つかったらヤバイと思い、これも今度一人で外に出たときにこっそり使おうと決めた。とりあえず今夜は、宙に浮くことができると思っただけで充分だ。

ゆっくりベッドに下りて布団を被る。眠くはないが目を閉じていると、いつの間にか寝ていたように、気付けば朝になっていた。

「おっさん、いつまで寝てるんだよ！ 起きないと置いてくぞ」

まさかニックに起こされるとは思わなくて、びっくりして飛び起きた。夜中に魔法を使ったのは全部夢だったのかな？ と考えてみたが、まあ夢でも現実でもどちらでもいいか。

その後、ニックと一緒に朝食を食べに食堂へ向かう。相変わらず、宿の食事は美味しくない。

「あれ？ そういえば商人さんがいないな。ニック、知らないか？」

「依頼主なら仕事に向かったぜ。商人の朝は早いからな。それで、おっさんは今日はどうするんだ？ あの商人は多分、明日には村を出ると思うぞ」

「俺はモブに、組み手と称した賤をする予定だよ。一日中」

「一日中ってどんだけ執拗にやるんだよ！」

「執拗っていうより、モブの気の済むまで相手になるつもりだよ。それに、モブだけじゃなくてビビの相手もするしね。ニックも暇なら一緒にどうだい？」

「俺は遠慮するわ。なんで村に着いてまで、おっさんと一緒に行動しなきゃいけないんだ。俺は勝手に村をブラブラ散策してるぜ」

「分かった。組み手が終わった後は、あの三人にどうするか聞いて行動するよ。村の中で組み手なんてやつたら住民に迷惑そうなので、とりあえず外のどこか広い場所でやることにしよう」

「ああ、魔物には気を付けろよ」

そう言うと、ニックは宿を出てどこかに行ってしまった。

さて、あの三人が泊まった宿をどうやって捜そうか考えながら玄関を出たら、なんと俺の目の前を三人が横切った。

「あれ？ ミーツさん、どうしたんですか？ こんなところで」

三人とも驚いた顔をしているが、俺だつて驚いた。まあ捜す手間が省けてよかったが。

「どうやって君たちを捜そうか考えていたんだ。食事はもう済ませたかい？」

「うん、済ませました。これからどうするか外に出て考えようつて、みんなで話していたところ
です」

俺に対して特になんか感情もないポケがそう答えた。

「ちようどいい、村の外で組み手をやろう。村の中では村人に迷惑をかけてしまうからね」

モブは黙つて頷く。ポケにも既に話していたのか、特になんかの説明もしないまま三人は無言で俺
についてきて、一緒に村の門へ行く。

村の門に門番の兄さんがいたので、これから外で組み手をやることを伝えた。すると兄さんが、
三人組の組み手が終わった後でいいから、自分たちの相手もしてほしいと言つてきた。俺は、時間
があればいいよと答えて村の外に出た。

村から近すぎてもいけないと思い、歩いて十分程度の、いい感じに開けた場所で行うことにした。
一対三で向かい合う。

「さて、誰からやる？ ビビかい？ それともポケかい？ 俺は素手でやるが、君たちは武器を
使つて戦つていいよ」

わざとモブの名前を呼ばずに、さらに武器を使つていいと煽つた。すると、案の定モブが一步大
きく前に出てきて怒鳴る。

「俺が最初に決まつてるだろうが！ おっさん、約束通り殺してやる！」

「いつでも来ていいよ」

モブは俺を睨みつけながら、背負っているロングソードを取り出して構えた。俺はまずはモブの
様子を見るため、自分からは行かずにダンク姐さんのようなデコピンの構えをとつた。ただし、ダ
ンク姐さんは人差し指と親指の構えだが、俺は普通に中指と親指の構えだ。

それを見たモブが怒りも露わに袈裟斬りをしてきたが、俺は紙一重で躲した。あと少しで当たる
と思わせるために、わざと紙一重のタイミングで躲したのだ。

次に胴体に向かって横に斬つてきたが、それも同じタイミングで躲す。そんなことを五分ほど続
けていると、モブがゼーゼーと息を切らして酸欠状態に陥つた。そんなモブに軽くデコピンをして、
尻餅をつかせた。

「もう終わり？ 呆気なかったね。俺を殺すんじゃないの？」

「ちくしょう！ やつてらあー！」

再度煽ると、顔を真っ赤にしたモブは剣を振り回しながらこちらに向かってくる。しかしさつき
と同じく紙一重で躲し、デコピンで太腿と両肩を打つて動きを封じた。

「終わり？」

最後にモブの額にデコピンをして、意識を刈り取った。

ちよっとやりすぎたかなと思いつつ、ビビたちの方を向く。二人は少し煽^{おほ}つたらどのような反応をするか試そうと思った。

「モブは終わったけど、次はどっちがやる？ 二人一緒でもいいよ」

俺の言葉にまずビビが反応して、ダガーを両手に一本ずつ持って構えた。それを見たポケも、俺が持つてる短槍よりもさらに短い槍を構える。

「モブとの実力の差はハッキリしてるのに、あそこまでやる必要あったんですか？ 私はあなたを尊敬しかけてたのに……軽蔑^{けいべつ}します」

ビビは地を這^はう虫でも見るかのような目で俺を見てから、攻撃を仕掛けてきた。それは、軽くてスピード重視のものだった。俺にとっては余裕で見切れるレベルだが、ゴブリンやホブゴブリンには速く感じるだろう。

「二人同時でもいいって言いましたよね。僕も行かせてもらいます」

ポケもビビに続いて攻撃を仕掛けてきたが、槍を突くスピードは遅すぎる。これではゴブリンを倒すのも時間がかかるはずだ。とりあえず、ビビに気を付けながらポケの背後に回って、軽く首に衝撃を与えて気を失ってもらった。

「ポケまで、許さない！」

モブもポケも殺したわけではないのだが……。ビビは憎^{にく}しみのこもった目で俺を睨^{にら}み、先日のニツクのように右へ左へと素早く移動しつつ、次から次へと攻撃を繰り返してきた。

そしてモブ同様、息を切らしはじめる。

「さて、そろそろ終わりかな」

「まだまだあ！ モブとポケのカタキ！」

苦しそうに息を切らしたビビは、それでもまだこちらを睨^{にら}みつけ、突っ込んできた。軽く足を引っかけると、勢いそのまま盛大に転んでしまった。

顔から地面にスライディングして、さすがにヤバイと思つて駆け寄る。ビビは顔をすり傷だらけにして気を失っていた。モブに対して以上にやりすぎたかもしれない……

「女の子の顔にこんな傷をつけたらマズイよなあ。まだやったことないけど、魔法でいけるかな？」
ビビを片手で抱き上げ、顔以外にも傷があったため、他の傷も治るように想像してみる。

どう想像したらいいか少し悩んだが、単純に傷が消えた姿をイメージし、清潔にするときの要領をやってみた。すると、エメラルドグリーンの鮮^{あざ}やかな光がビビを覆い、傷が塞^{ふさ}がっていった。どうやら成功したようだ。

外傷がないポケにはやらなかったが、モブにも同じ魔法をかける。こちらも綺麗^{きれい}に傷が消え、俺

が肩や太腿をデコピンで弾いた痕もなくなっていた。
傷を癒した頃、モブが起き上がった。

「……傷が消えてる。それどころか、身体にやる気がみなぎってる。これ、あんたがやったのか？」
この魔法に、やる気を生み出す効果まであるのかどうかは分からない。とはいえその可能性もな
くはないので、とりあえず、自分の力だと言っておこう。

「そうだよ。俺が怪我をさせてしまったからね。ビビを先に癒して、その後モブを癒したんだ」

「クソ！ ビビはお前なんかには渡さない！」

「勘違いしてるようだから言っておくけど、ビビとは本当に何も無いよ。一昨日の夜は、ビビが見
張りのときにたまたま俺が起きたから、雑談してただけだし」

「だけど、頭を撫でてたじゃねえか！」

「じゃあ、モブの頭も撫でてやるよ。いいことをしたり、俺が偉いと思うことをしたらだけど」

「いらねえよ！ 誰が、おっさんに頭を撫でてもらいたいなんて言った！」

モブは真っ赤な顔をして、全力で拒否してくる。それは確かに気持ち悪いか。

「とにかく。ビビを取られるかもって思ってるようだけど、それはモブの勘違いなんだ。俺は子供
に欲情するほど変態じゃないから。多分ビビは、お父さんの愛に飢えてたんじゃなかな」

「聞いたのか、俺たちが孤児だってこと。それで同情でもしたか？」

「いや、同情なんてしないさ。同情してほしいならするけど、モブたちはそんなの望んでなんかい
ないだろう？」

俺の言葉に、モブは唇を噛んで俯いた。子供にだって、ちゃんと矜持はあるのだ。

「孤児であることは、モブたちのせいじゃない。でも、君たちが誰の行動を見て冒険者のことを学
んだか分からないけど、今の態度のままじゃダメだね。依頼主に挨拶もしない、とかさ。それか
ら戦闘についても、後で魔物との戦いも見せてもらうつもりだけど、改善しなきゃいけない点は多
いと思う。アドバイスをさせてほしい。俺も戦闘のプロではないが、多少は役に立てるよ。おせつ
かいなのは承知している。でも、見すごせなくてね」

するとモブは顔を上げ、意を決したように言った。

「それならおっさん、あんたも武器を使って本気で相手してくれ。そしたら俺はあんたに従うよ」

「残念ながら、俺が武器を持ったらモブを殺してしまう。だから素手でやるけど、さっきみたいな
デコピンではもうやらない。そして、勝ったら言うことを聞いてもらうぞ。あと、モブも本気で
いい。もしそれで俺を殺してしまったならそれでもいい」

「上等だ！」

俺が手を前に出して適当に構えると、モブは剣を槍のように構えて突っ込んできたが、俺はそれ
を軽くいなした。

次に、先程見た袈裟斬りを仕掛けてくる。今度は避けずに、それを親指と人指し指で掴んだ。

「なっ……おっさん、そんなこともできるのか！」

モブは剣を手放して殴りかかってきたが、それも手の平で受け止め軽く掴んでやる。

「ぐああああ！ チクシヨウ！ 殺す！ 殺してやる！」

「まだそんなことを言える立場にあると思ってるのかい？」

モブの拳を掴む手に力を込めた。

「クッソー！ 痛ててて、参った、参ったから放せ！」

「まずは言葉遣いから直さないとイケないな。この場合は『放してください』だよ。ちゃんと言わないと、骨が砕けるまで握るよ」

俺は手にさらに力を込めた。

「分かった！ 分かった！ 分かったから放してください！」

モブは俺が教えた言葉を大声で繰り返す。ひとまず合格と手を放してやったら、モブはその場に座り込んで、手を押さえた。

「目上の人間には敬語や丁寧な言葉を使うように、これから指導してやるからね」

「げ！ マジかよ……なんで俺がおっさんなんかに」

「そこ！ そこはマジかよじゃなく、本当ですか？ もしくは本気ですか？ だよ」

早速注意をして、軽く額にデコピンをした。

「……本気ですか」

「そうだよ。これからピシバシいくよ」

こうして、なかなか目を覚まさない二人をよそに、モブの躡を開始した。二人が起きるまで、ひたすらモブと二人きりで……

第五話

モブを躡けていると、ポケが目を覚ました。

本当はビビも意識を取り戻しているが、まだ気絶したふりをしていることに俺は気付いていた。なぜ気絶したふりをしているのかは分からないが、ひとまず気にしないでモブを躡けていく。

「ポケが起きてきたから、もういいでしょう？」

モブはいい感じに丁寧な言葉遣いになってきていたので、とりあえず躡は中断することにした。だが、モブの様子や言葉遣いが違ってすることに気付いたポケが、槍を俺の方に向け叫ぶ。

「兄ちゃんに何した！」

怒った様子で俺に突っ込んできたが、それを見たモブが慌てて割って入った。

「ポケ、いいんだ。この人は、ミーツさんは信用してもいい大人なんだ。俺はこの人に色々教えてもらってる途中なんだよ」

「でも、兄ちゃん」

「いいんだ！ 俺の言うことを信じないのか？」

モブがポケの言葉を遮って強めに言った。

「分かったよ。でも僕はまだおじさん、あなたを認めてないですから」

「とりあえずはそれでいい。ポケは、俺の行動や言葉遣いを見て学べ、俺は今日から変わる」

不満げなポケを宥めるように言うモブは、さっきまでとはまるで別人のようだ。

言葉遣いが荒くなるたびにデコピンをして注意する、というのを繰り返していくうちに、ようやくモブも変わってきた。でも、額が真っ赤なので、少しやりすぎたかな。人にちゃんと接する大切さも分かってきたようだから、そろそろデコピンは控えよう。

「ポケも起きたことだし、魔物退治でもしようか」

「まだ、ビビが起きてないですよ、師匠」

あと、モブは俺のことを師匠と呼び出した。

先程まで殺すと息巻いていたのに、凄く変わりようである。

「いや、起きてるよ。ポケが起きる前からずっと、気絶したふりをしてるんだ」

「気付いていたんですね」

ビビはやつと、バツ悪そうに起き上がった。

「ビビ、いつから起きてた！」

「ミーツさんが、私とモブを治療してくれたときからだよ」

「そんな前からかよ！ なんで気絶したふりなんかしてたんだ？」

「モブが容赦なくやられたのを見て、私も頭に血が上っちゃって……ミーツさんと戦ったの。でもあっさり負けちゃった。目が覚めたとき、傷だらけだったはずの身体が綺麗になってるのを見て、ミーツさんが治してくれたのかなと思った。そこでやつと気持ちが悪く落ちて、ミーツさんはどうして私たちにあんなに厳しくしたのか知りたくなって、気絶したふりをして様子を見たのよ。モブも、私が気絶したままの方がよかったですよ？」

「ああ、ビビが起きてるのを知っていたら、ミーツさんに対して素直になれなかったと思う」

さすがビビ、あの短い時間で色々と考えていたようだ。二人が落ち着いたのを確認して、俺はこの後のことについて提案をした。

「まあ詳しい話は、また夜にでも村の宿でしたらいいんじゃないか？ これからみんなで魔物退治をするからね」

「師匠！ 魔物退治って何を倒すんですか？」

「モブがミーツさんを師匠って呼ぶの、違和感があるよね。ふふふ」

「うるさい！ ミーツさんは尊敬できる人だ！ だから敬うのは当たり前だ」

なんか洗脳したみたいになってしまった……。ニツクに今のモブを見られたら、ヤバイ気がする。「さつき、その森に二足歩行の大きな猪みたいなやつが見えたから、それを狩ってみるか」

「それってオークじゃないですか？ 僕はまだオークは一人では無理です」

不安げにポケが言う。確かにポケは、あのゴブリン戦を見る限りでも、ゴブリン以上の魔物を狩るのはまだまだ無理そうだ。

「私も一人では無理かな」

「俺でギリかも」

ビビもまだ無理か。モブはどうか一人で行けるようだが、それでも自信はないらしい。

「一人ひとりでは無理でも、全員でちゃんと連携が取れていれば大丈夫だと思うよ。まずは俺が弱らせてから、君たちがトドメを刺すやり方でもいい。とりあえず、やってみよう」

俺は石を拾い上げ、現在いる場所から少し離れた森に向かって投げた。

プロ野球選手のストリートより速いのではないかと思うくらいの速度で、石が森に消えていく。すると「ブオオオン」という呻き声が聞こえ、一匹だけだと思っていた猪が五匹も出てきた。

さすがに五匹同時はこの子たちには荷が重いと感じ、短槍で猪の肩や腿ももを突いて、五匹全て動けない状態にした。猪はホブゴブリンよりも動きが遅く、全く動いていないのではないだろうかと思うほど簡単に終わった。猪は荒い息遣いのまま、血まみれでその場に転がっている。

「え？ ど、どうやったんですか？」

「ミーツさん、槍に血が付いているけど、いつの間に槍で倒したの？」

「え？ おじさんが石を投げてから、え？」

ポケとビビが呆気あきけに取られている。石を投げてからの俺の行動が見えなかったようだ。ポケに至っては混乱している。

俺も初めて見る魔物で加減が分からなかったため、やりすぎたかもしれない。

「えーと、モブたちのレベルがいくつかわからないけど、強くなるにはレベルを上げるのが手っ取り早いと思うんだよね。今がそのチャンスだ。モブにポケにビビ、無力な猪を狩るんだ！」

俺がやらかしたのをごまかすべく、もつともらしいことを大声で伝えてみる。すると気を取り直したモブが先に動き、猪の頭を剣で貫いた。それを見たポケとビビも続く。

三人がそれぞれ一人で一匹を倒したところで俺はストップをかけ、残りの二匹はポケに倒させた。やっぱり一番レベルが低いであろう彼に経験を積ませたかったからだ。

「差し支えなければ、みんなのステータスを見せてくれないか？ もし嫌なら、レベルだけでも自

「已申告してほしい」

「俺はいいですよ。師匠の言うことですから」

「私もいいですよ」

「僕はまだあなたを信用していないから嫌だ」

モブとビビは了承したが、ポケは拒否か。まあ今のところは仕方ない。

「それなら、モブもビビも見せなくていいよ。レベルだけ教えてくれるか？」

「僕が出さなくなつて、兄ちゃんたちのは見たらいいじゃないか！」

「それでは意味がないんだよ。二人だけ強くなつてもダメなんだ」

俺はしやがんでポケと目線を合わせると、なるべく優しく言葉をかける。

「たとえば複数の敵が現れたとき、今のポケでは二人と同じようには戦えないだろう。じゃあどうする。逃げるか、それとも隠れるのか？ 君たち三人で一つのパーティだろ？ ポケも一緒に強くなって二人を支え、いざれパーティを引っ張っていけるくらいの存在になった方がいいと俺は思うんだけど、どうかな？」

ポケは俯うつむいて何かを考えているようだったが、やがて顔を上げると、レベルだけ教えてくれた。それを聞いたモブとビビも、レベルを覚えてくれた。

レベルは、モブ17、ビビ15、ポケ15。さっきの猪を倒して、このレベルになったという。

倒す前だと、モブ14、ビビ12、ポケ5。

そのレベルでよくEランクまで上がったなど、感心してしまった。

「みんな、もつとレベルを上げる必要があるな。ちなみにこの魔物つて食べられるの？」

「食べられますよ。今まではギルドで換金してしまつたから食べたことはないですけど、村に持つていってあげたら喜ぶと思います」

そうなのか。食べられるなら死骸はまとめて置いておくかと考えているうちに、既にモブとビビがまとめてくれていた。

「お、モブにビビ、気が利くね」

モブとビビの頭をワシャワシャと撫なでてやる。

ビビは嬉しそうに目を細め、モブは気恥かずかしそうに俯うつむいてニヤケているようだ。それを見たポケが、悔なしそうに手を握にぎってプルプル震ふるわせている。

「ポケもいいことをしたら撫なでてもらえるよ」

アドバイスのつもりなのだろう、ビビはポケの頭に手を置いてそう言ったが、ポケは彼女の手を払い退のけた。

「撫なでてなんかもらいたくない！ 兄ちゃんが嬉うれしそうにしてるのがムカつくんだ」

おそろくポケは、俺に対して嫉しよ妬ひしていた。

そうだよな。自分の尊敬している兄が、昨日今日会ったばかりのおっさんにいいように洗脳されて懐いているなんて、我慢できないよな。

まだポケは俺に心を開いてくれないが、それでも彼らの動きを見ながらレベリングしなければいけない。

このレベルなのにEランクまでなれたこの子たちなら、俺よりもっと強くなるはずだ。その証拠に、ポケにさつきと同じ動きで槍を突かせてみると、レベルが少し上がっただけで随分とスピードが増していた。これなら、ゴブリン程度に苦戦することもないだろう。

その後は、全員のレベルを20まで上げるのを目標に、俺が森に入って魔物を連れてきては三人に戦わせることを繰り返した結果……モブ20、ビビ19、ポケ18までレベルを上げることができた。

ひとまずモブが目標のレベルに達成したところで、もう昼をだいぶ過ぎてしまっていたので、倒した猪と、別で倒した二足歩行の牛を食べることにした。

牛を倒したとき「これってミノタウロスってやつじゃ……」とビビが言っていたが、きつと違うだろう。ミノタウロスは牛の頭に身体は人間という化け物だが、倒した魔物は全身が牛だった。

見た目は茶色で鬮牛っぽく、後ろ脚二本で立っていた。そして、鉤爪かぎつめのような形をした前脚で襲ってくるのだ。見れば見るほど、やっぱり俺の知っているミノタウロスとは違う。

まずは平べったい岩を見つけ、その岩の下に隙間すきまができるように大きめな石を二つ置く。これを

鉄板代わりに焼肉をすることにした。タレはないが、ありがたいことにビビが塩を持っていた。

魔法で調味料を出そうと思えば出せるのだろうか、この子たちのことを信用しているとはいえず、あまりホイホイ想像魔法を使うわけにもいかない。それだけ特殊な魔法だという自覚はあった。

なお、二足歩行の猪と牛の肉は血抜きをして、川の近くに置いてきている。少しでも腐くさりにくくするためだ。周りに畏を仕掛けておいたので、奪われる心配はないだろう。

第六話

レベル上げが終わる頃には、ポケも俺に懐なついてくれていた。みんなで仲良く食べたあの二足歩行の牛が意外と美味うまいかったのと、今日一日一緒に戦ったことで距離が縮まったのだと思う。

「さて、帰りは村まで競争するか？ もちろん、俺は何かあったときのために最後を走るから」

「いいですね、やりましょう」

「私もいいですけど、ポケが不利になっちゃうんじゃないかな？」

モブもビビもやってもいいと言うが、ビビの言葉になるほど思った。

「じゃあ、少しハンデをつけることにしようか。まずポケがスタートして、二十秒後にビビがス

タート、その二十秒後にモブが走るっていうのはどうかな。最下位には罰を、一番に村に着いた人にご褒美ほうびをあげるとか決めたら、やる気が出るだろう？」

「それなら、僕やってもいいです」

「うん！ 私もそれならやります」

「師匠、ちなみに罰ってどんなのですか？」

よかつた、ポケもやる気を出してくれた。

「そうだな、村に着くまでの時間分くすぐりの刑とかどうだろう。あとは、村の門番の組み手に付き合わなくてはいけないとか？」

「げっ、マジですか？」

「げって、モブはどっちが嫌なんだ？ 組み手か、それともくすぐりの刑？」

「私だつたらくすぐりがマシかなあ」

「僕は組み手はやつてもいいですけど、くすぐりは嫌です」

「俺は組み手が……嫌じゃないけど、くすぐりの刑の方がいいデス」

モブが組み手が嫌と言いそうになったので軽く睨にらんだら、慌あわてて言い直した。

「分かった。それならモブとビビはくすぐりの刑で、ポケは村の人との組み手でいいな。じゃあ一番を取つたらどうしようかな。夜に俺がマッサージしてやろうか？」

「それ気持ちいいの？」

「ポケ、試してみたいか？ 多分気持ちいいと思うよ。試しに後でニックにやってみせよう」

「可哀想、ニックさん……」

「ビビ、そんなことないぞ。気持ちよすぎて喜ぶかもしれないよ」

「俺は遠慮したいです」

どうやら不評のようだ。他に何がいいだろうと考えると、いいことを思いついた。

「俺の、この今着てる服をあげるっていうのはどうだろう。モブたちにはまだ大きすぎるけど、でも格好いいだろ？」

「師匠のセンスは壊滅的ですね」

「ミーツさん、それはないです」

「僕はそれ、いいと思いますけど、確かに僕には大きすぎます」

「えっ！ ポケ、本気?！」

唯一いい反応をくれたポケに、モブとビビが揃そろって叫叫びぶ。

「ポケ、本当に格好いいと思ってるのか？」

「ミーツさんのセンスのなさを見続けて麻痺まひしちゃったんじゃない？」

散々な言われようである。

俺ってそんなにセンスが悪いのだろうか。この世界に来たときの服は昔、友達と買ったもので、そんなに悪くなかったはずだが。あ、でも、あの高校生たちにも笑われたな……

よし、帰ったらシオンとダンク姐さんに、この服装について改めて意見を聞こう。きっとポケ以外の若者には、この服のセンスのよさは分からないのだろう。

「二人への褒美は、足裏マッサージにしてあげるよ。これはやられてるときは少し痛いけど、終わればすつきりするからやった方がいいよ。そうだ、順位関係なく二人にはやってあげよう。これは決定だ。ちなみに逃げてでも無駄だから、必ず追いかけて捕まえる」

俺は昔、足裏マッサージの資格を取ろうと勉強していたことがあったので、ある程度の知識は持っていた。だから問題ないはずだ。決して、センスを馬鹿にされたお返しではない。

「マ、マジか」

「私はちょっと興味あるけど、ミーツさんの痛いつて言葉が引つかかる」

「僕には何かありますか？」

「そうだな、王都に帰ったらポケに何か買ってあげようか。もしくは、村で何か美味いものを食べさせてやるのか？」

「僕は何かを食べるんだったら、みんなと一緒にがいいです」

「ポケはいい子だな」

ポケは懐けばとても可愛い子で、思わず頭を撫でていた。

「僕は今、ご褒美をもらいました」

ポケが俯いて何か呟いたようだが、よく聞こえなかった。

「じゃあ、ポケには村に着くまでに考えておくよ。よし、始めようか！俺はちょっと猪と牛の肉を取ってくるから、その間に始めていいよ」

始めていいよと言った瞬間、ポケはダッシュして走り去っていった。レベルを上げただけあって、随分と速くなったものだと感心したが、呆けて見ている場合ではない。俺もダッシュで川まで肉を取りに行った。

俺が先程までモブたちがいたところに戻ってきたときには、もうみんないなかった。

肉を担いで、先を走っているであろうモブたちを追いかけると、五秒後くらいにモブの背中を捉えた。どうやらモブは、まだビビやポケに追いついていないようだ。

「師匠！絶対ポケのハンデはやりすぎですって！絶対追いつけないです」

うん、それは俺もポケのダッシュを見たときに思った。けれどそれを口にしたら、俺の判断が間違っていたと認めたことになってしまいうので、あえて活を入れてみよう。

「モブ、お前ならできる！できるはずだ！気合いだ、気合いを入れろ！」

どこかで聞いたことのあるフレーズを言いつつ、モブの背中を強めに叩く。すると、かなり痛かったのか涙目になったが、すぐに目つきが変わったような気がする。そして、全力で走っていたはずのモブのペースがさらに上がった。

おお、やればできるじゃないか！ と思いながら俺の方は余裕でついていたら、やがてビビの背中を捉えた。そしてビビの二十メートル先くらいにポケモいた。

だがもう村まであと少しの距離だ。このまま行けば、ポケが勝てるかもしれない。しかしビビもまだ余力を残しているようだから、まだ可能性は充分ある。

さて誰が勝つだろうかと見ていれば、やっぱりビビが最後に追い抜いて勝利した。ラスト五十メートルというところで、ビビが一気にスピードを上げたのだ。元々スピード重視の戦い方をするビビは、普段から速さを意識して行動していたから、多分狙い通りだったのだと思う。思ったより持久力もあつたみたいだ。

続いてポケ、最後にモブがゴールした。ギリギリでポケが逃げ切ったという感じだ。

今日も門は閉まっているので、俺は肉を地面に置き、門を叩いて門番を呼んだ。すると朝に挨拶をした兄さんが出てきて、嬉しそうに、今度は自分たちとも組み手をお願いしますと頭を下げた。ん？ 今、自分たちと言ったか？

門番の兄さんは二人いて、そのうちの一人がどこかに走っていった。

「兄さん、もしかして組み手するのは二人だけじゃないのか？」

「はい！ 自分を入れて六人います」

出発前に約束してしまった手前、人数関係なく組み手をしなければならぬ。しかし、もう一人の門番に連れられてきた仲間たちは、俺を見てざわめいた。そして俺と話していた兄さんも交えて、何やら相談を始める。

「あの、こちらからお願したことなんですが、やっぱり組み手はなしでお願いします」

戻ってきた兄さんは、そう言うと思し訳なさそうに頭を下げた。人数が増えたことで、俺が怒つてやめるとも言うと思つたのだろうか。

「人数が増えても、こつちは別に構わないよ？ 六人でも十人でも相手になるよ」

門番の兄さんは黙って俯いてしまったが、背後にいる仲間の一人が怒ったように前に出てきた。

「おい、ハッキリ言えよ！ おっさん、あんた最低ランクのGランクじゃねえかよ。チツ、誰だよ、おっさんの凄腕冒険者が来たとか言つたやつ。こちとら道具屋のあの子を口説いてたつてのによ」

言われて門番の仲間たちを見ると、彼らの顔は俺がGランクだからと見下していた。

隠していたわけではないが、どうやって俺がGランクだと知つたのだろうか……と思つたが、俺のギルド証である首飾りが服の上に出ていた。なるほど、これで分かつたのか。

一日中モブたちのレベル上げで魔物を相手にしていたから、服の中に隠れていたギルド証が自然

と表に出たのだろう。

組み手の必要がなくなつたならもういいかなと、地面に下ろしていた猪と牛の肉を担ぎ上げる。さあ移動しようというところで、俺の真横でモブがブルブルと震えながら叫んだ。

「デメエら！ 師匠はGランクでも、Cランク以上の実力を持つてんだぞ！ 師匠を侮辱するなら俺が相手になつてやる、武器を取りやがれ！」

「そ、そうだよ。兄ちゃんの言う通りだよ。門番のおじさんたち、僕も、あ、相手になつてやる」「そうだよねえ。ミーツさんをここまで馬鹿にされたら、さすがにカチンと来るよねえ」

モブだけではなくポケとビビも俺のために怒ってくれている。門番の兄さんを含めた仲間たちに向かつてモブは剣を抜き、ポケは槍を構え、そしてビビは両手にダガーを持ちリズムよく飛び跳ねている。

「へえ、ガキどもが俺たちの相手になるつてよ！」

「ハハハ、見逃してやるから、怪我しないうちに帰りな。あ、お嬢ちゃんは置いていけよ」

門番の兄さんは俯いて震えているだけで、他の仲間たちはクズだった。そんなクズの言葉に真っ先に動いたのはモブだ。

モブは俺を見下しているクズの首元に剣で斬りかかったが、ギリギリのところ俺がその剣先を指で掴んで止めた。

「ヒイ、な、なんだよ。いつの間に動きやがった」

クズはモブと俺の動きが見えなかつたらしく、股間を濡らして尻餅をつくど、急いで後退りする。「師匠、なんで止めるんだよ！ あいつら師匠を馬鹿にしただけでも許せないのに、ビビを置いてけつて言ったんだ。殺されてもしようがないだろう」

「モブ、落ち着け。ポケもビビも手を出しちゃダメだ。君たちは今後、依頼でまたこの村を訪れることもあるだろう。採め事は起こすな」

いくらクズとはいえ相手は村人だ。それに、実力はこちらの方が圧倒的に上だと分かる。実力差があるのに怒りに任せて手を出してしまえば、確実にこちらが悪ことになる。ギルドからも何からしらの罰が下るだろう。

俺はこちらの世界の常識が分からないから、村人を手にかければどうなるかなんて知らない。だが、ただでは済まないことは確かだ。

俺の言葉にモブは渋々といった感じだが、剣を引いて鞘にしまった。ポケも槍の先を上にし、ビビも両手を下げた。先程まで笑っていたクズどもは、完全に戦意喪失していた。

「おじさんつて……俺はまだ二十三歳だあ！」

そんなとき、今まで俯いてブルブルと震えていた門番の兄さんが自分の年齢を叫んだ。どうやら、先程ポケにおじさん呼ばわりされたことをひどく気にしていたらしい。

それにより殺伐とした空気が一変して、笑いが起きた。といつても、笑っているのは俺たちだけだが。向こうのクズどもはすっかりモブを恐れているのか、完全に怯えた目でこちらを見ている。

「お、ミーツのおっさんじゃん。どした？ こんな村の入口で」

そこへ何も知らないニツクが、呑気にやってきた。俺たちと門番の間に不穏な空気が流れていることに気付いたようだが、あえて何も言おうとしなかった。

「その肉、おっさんが狩ってきたのか？ 結構いい肉みたいじゃねえか、宿屋のおやつさんに調理してもらって食おうぜ」

「ああ、いいよ」

「よっしゃ！ 腹減ってたんだ。商人のおっさんも明日には帰るだろうし、俺たちも宿に戻ってメシにしようぜ」

ニツクは俺の背後に回り込むと、無理矢理背中を押して宿の方へ向かう。クズどもはじっと黙っていた。モブに対してだけでなく、ニツクにも怯えているようだ。

別の宿屋に泊まっていたモブたちも、そちらを引き払って俺が泊まっている宿に来た。そして宿の食堂で、俺たちが狩った肉をみんなで美味しくいただいた。

食事も終わって、モブたちとニツクが今日魔物を倒した話をしているとき、俺はやらなければいけないことを思い出した。それはマッサージと罰についてだ。

「さあ腹いっぱいになったし、そろそろ罰を受けてもらおうかな」

椅子に座っているモブの肩に片手を置いて動けなくした後、もう片方の手でモブの脇をくすぐっていく。最初はモブもくすぐったそうに笑っていたが、次第に笑いとも悲鳴とも聞こえる声に変わり、最終的に失禁して泣いてしまった。

これはさすがに俺も反省して、モブの身体と服を魔法で綺麗にしてやった。

「ミーツさん、罰とはいえこまでする必要があったんですか？」

「兄ちゃんが、兄ちゃんが……」

「おっさん、ひどいな、モブが何したってんだよ」

みんなから口々に責められる。

「正直やりすぎたと思ってるよ。途中から楽しくなっちゃってねえ。モブ、悪かった。謝るよ」

「うづう、いいです。昨日までの俺の師匠に対する態度への罰どじだらじようがないと思います」

「そう、そこだよ！ なんでモブはおっさんのことを師匠と呼んでんだよ！ 昨日まではおっさん殺すとか言っていたのによ」

「うん、まあ、それは後でモブに直接聞いてくれよ。俺はモブに師匠と呼ぶのをやめさせたいんだから。さあ罰も終わったし、次は人によっては罰ともご褒美ともなるマッサージの時間だよ。最初の相手はニツクだ」

「はあ？ なんで俺？」

今、宿屋の食堂には俺たちしかいないため、やりたい放題だ。ニツクの足を掴んで床に転がし、そのまま横になってもらった。俺がマッサージと言った瞬間、ビビとポケがスペースを作るためにテーブルや椅子をずらしてくれていたの、俺は遠慮なくニツクの靴を脱がして裸足にする。そして親指をグリグリとニツクの足裏に押しつけはじめた。

「イテエ、イテエっておっさん！ ギャアアアアアアッ」

ニツクは、足裏マッサージを受けはじめたときは、痛い痛いと言っていた。モブのくすぐりの刑のときと似たような流れだが、ニツクは大人だし大丈夫だろう。

気絶してしまつては仕方ない。次は誰にしようかと周りを見ると、モブと目が合った。次は彼だと手を伸ばしたら、もの凄い勢いで逃げていった。

階段を駆け上がり、扉を閉める音が響いた。どうやら自分たちが泊まる部屋に逃げ込んだらしい。では今日のところはお開きにしよう、移動していた椅子を元に戻そうとしたところで、ビビとポケが同時に俺の手に触れた。

「くすぐりは嫌ですけど、ニツクさんと同じマッサージはしてほしいです」

「私も。ミーツさん、私たちにもしてくるって言つてたじゃない」

「いいのかい？ ニツクが気絶するほどだよ？」

二人が笑顔で頷いたことにより、マッサージは俺が泊まっている部屋で行うことにした。

今日は一人部屋を確保したため、二人には俺の部屋で待ってもらおう。その間に、まだ気絶しているニツクを、昨夜商人と泊まっていた部屋が今日も空いているというので、そこへ寝かせた。

そして俺の部屋に入る。既に二人は裸足でベッドで横になっていた。どちらからやろうか悩んだのち、ビビから足裏マッサージを行うと、気持ちいいと言いながら寝てしまった。

そのまま寝かせておいて、続いてポケのマッサージをしてやれば、ビビと同じく気持ちよさそうに眠つてしまう。仕方ないので、宿の主人に彼らの部屋の場所を聞き、二人を抱っこして連れていった。そのときにはもうモブは寝ていたため、見逃してやることにする。

どうやらビビとポケは完全に健康体で、しかも若いからか、身体の悪いところもないらしく、足裏マッサージで痛みは感じなかったらしい。羨ましいなと思いつつ、俺も自身の部屋で休んだ。

第七話

思ったより早く眠ることができたが、昨夜と同じでまた夜中に目を覚ましてしまった。